We 25R

No.244　03/09/02

真逆の正解

朝日新聞GLOBEから引用。さて、誰の言葉だと思う？

＊

「演技を学んだことがなく、流されるままやってきた。なにかが違うと思っても、技術を知らないから、なにが違うのかわからない。目の前のシーンを一つずつ必死でこなすしかなかった」

一人で試行錯誤していた24歳の夏、野田秀樹(57)と出会った。舞台「キル」の稽古場で野田に言われた。「悲しいときに泣かない。涙を流すときは、下ではなく上を向く。そうすることで、本当の悲しみが伝わることもある」

正しいと思っていたことの真逆に正解があるのかもしれない。はっとさせられた瞬間だった。「こういうことを知りたかったんだ、と初めて気づいたんです。演じることのスタート地点に立てた気がした」

＊

舞台「キル」がヒントになるかも知れない。記事はさらに次のように伝えている。

＊

この人の周りには透明な空間がある。**深津絵里**(40)と話をしながら、不思議な感覚にとらわれた。しゃべっているときも、食事をしているときも、その空間はずっと消えない。他人のなかに入りすぎず、自分も含めた場の光景を、どこか遠くから眺めている。そんな視線をもっている。

瑛太(30)は昨年、舞台で深津と共演して同じような印象をもったという。「人との距離の保ち方に、心地よさと、凜(りん)としたたくましさがある。言葉でないところで、なにか言われている気になりました」

本人に理由を尋ねると、「一人っ子だから一人の世界を邪魔されたくない、という思いがあるのかも」と笑った。

照れ屋なので、熱演することが恥ずかしい、とも言う。「集中しつつも、終わったら何を食べようかな、と考えながら演じるくらいがちょうどいい。そのバランスが、とても難しいんです」

＊

というわけで、役者諸君はこの深津絵里さんの（野田秀樹さんの？）演技論をぜひ参考にしてほしい…って、ちょっと高級過ぎるかも知れないが、低級なレベルで自分を納得させるのではなく、より高い次元を目指してほしいものである。役者でない諸君にとっても、こんな視点があるんだということを知っておくことは、いろいろな意味でプラスになるに違いない。

しかし、その演技力を発揮する前に、まずは全員に「学力」を発揮してもらわねばならない！　日比谷の前期期末考査は、例年どうも結果が今一つピリッとしない。長い夏休みの間に、それ以前にやっていたことがすっかり抜け落ちている人が多いからである。ここは是非発憤して、この一週間で学校生活のリズムを取り戻しつつ（遅刻厳禁！）、「夏休み脳」を「学習脳」にきっちり切り替えながら、やるべきことを確実にこなしてほしい。

勉強に関しては「真逆」というのはあまりない。真正面から全力勝負でぶつかっていく正攻法が第一だ。どの科目も力を抜くことなく、しっかり正面から取り組もう。